

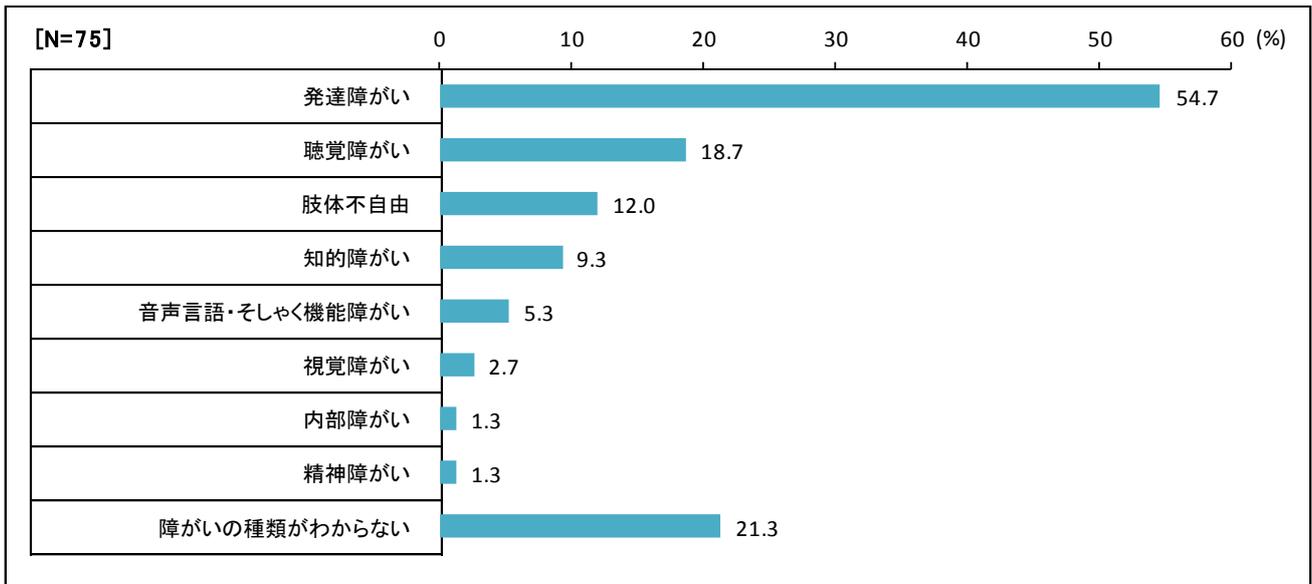
2. 障がいのある子どもの参加状況

(1) 障がいの種類

障がいの種類をみると、「発達障がい」が最も多く 54.7%であった(図表 2-1)。次いで、「聴覚障がい」18.7%、「肢体不自由」12.0%、「知的障がい」9.3%であった。また、「障がいの種類が分からない」が 21.3%であった。

聴覚障がい、肢体不自由、音声言語・そしゃく機能障がい、視覚障がい、内部障がいの割合を合わせた、「身体障がい」の割合は 40.0%となる。

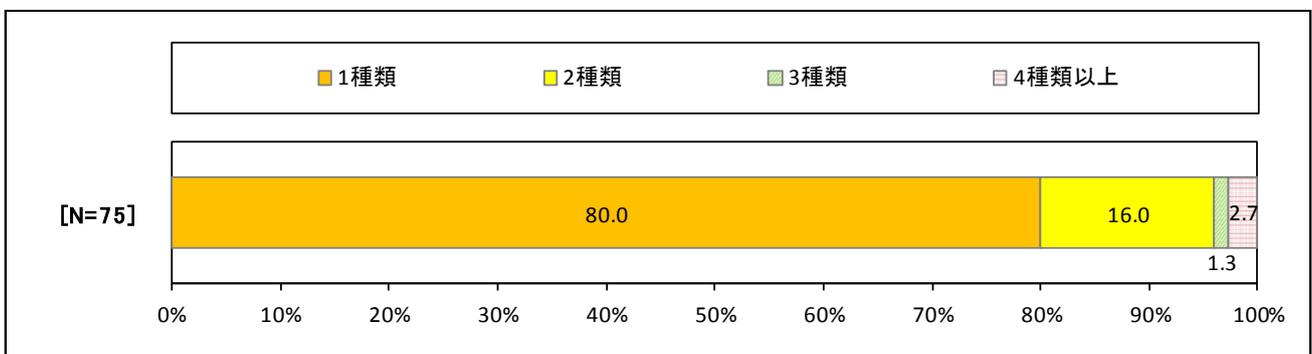
図表 2-1 障がいの種類 (複数回答)



(2) 障がいの種類数

障がいの種類数をみると、「1種類」(80.0%)が8割を占めている(図表 2-2)。次いで、「2種類」(16.0%)、「4種類」(2.7%)、「3種類」(1.3%)と続く。8割の単位団で、参加している障がいのある子どもの障がいの種類は1種類であり、参加している子どもに重複障がいがある、もしくは異なる種類の障がいの子どもが参加している単位団は2割にとどまる。

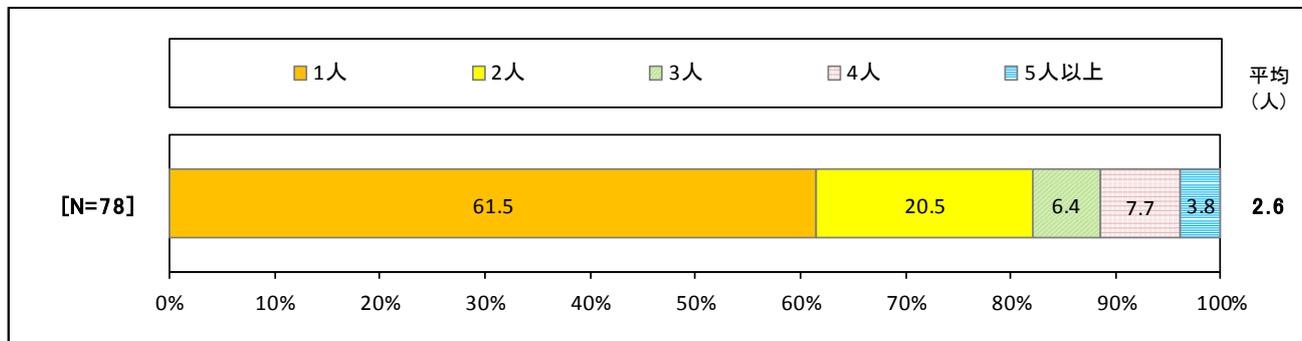
図表 2-2 障がいの種類数



(3) 障がいのある子どもの合計参加人数

障がいのある子どもの合計参加人数をたずねたところ、「1人」(61.5%)が6割強で、最も多くあげられている。次いで、「2人」(20.5%)、「4人」(7.7%)、「3人」(6.4%)、「5人以上」(3.8%)と続く(図表 2-3)。平均は2.6人であった。

図表 2-3 障がいのある子どもの合計参加人数

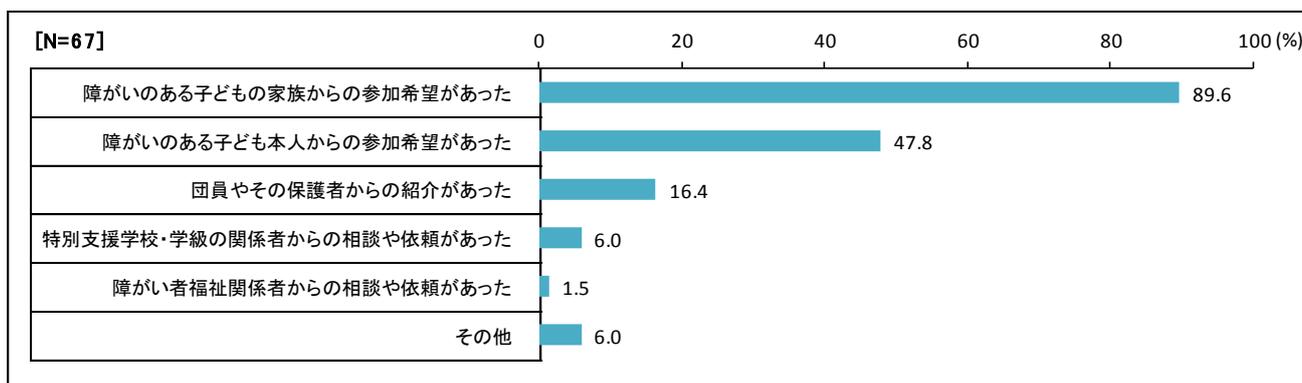


(4) 障がいのある子どもの参加経緯

障がいのある子どもの参加経緯をたずねたところ、「障がいのある子どもの家族からの参加希望があった」(89.6%)が9割と最も多くあげられた(図表 2-4)。次いで、「障がいのある子ども本人からの参加希望があった」(47.8%)、「団員やその保護者からの紹介があった」(16.4%)と続く。

「特別支援学校・学級の関係者からの相談や依頼があった」(6.0%)、「障がい福祉関係者からの相談や依頼があった」(1.5%)はいずれも1割未満である。

図表 2-4 障がいのある子どもの参加経緯(複数回答)



(5) 主な活動種目別にみた障がいの種類

単位団の主な活動種目(図表 1-7, p.9 参照)の上位 5 種目について障がいの種類をみると、柔道、剣道、バレーボールで「発達障がい」が半数を超え、合気道では 37.5%、空手道は 20.0%であった(図表 2-5)。

活動種目のうち最も割合の高かった柔道と空手道に着目すると、柔道では「発達障がい」に加え、「聴覚障がい」「知的障がい」「精神障がい」が参加しており、そのほかの種類はみられなかった。一方、空手道では「精神障がい」以外はすべてみられ、参加している子どもの多様性がうかがえる。

図表 2-5 主な活動種目別にみた障がいの種類

